
俺と双子の彼女たち

大野木 大助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と双子の彼女たち

【Nコード】

N2506Z

【作者名】

大野木 大助

【あらすじ】

進級し高校二年になった朝。北神美姫夜は一人の少女にぶつかるとその少女のせいで警察署に連行されるは気絶するは、でもう散々。仕舞いには妹、兄、メイドなんかも出てきて「一緒に住みましょう」だとか、「妹とはどういう関係?」とか「貴様……殺すぞ」とか、非日常に吞まれていく。いったいこれから、どうなんだよ……

プロローグ的な(前書き)

あらすじがよく分かんないですが、こんな感じですよ。

プロローグ的な

「……何をどう間違えてこうなってしまったんだ？」

そう言っつて、交番の奥にある暗い部屋で一本の電気スタンドの乗った机を、警察と向かい合うように挟んで座らされた俺こと北神^{きたかみ}美姫夜^{みきや}は溜め息混じりに呟いた。そして時は朝までさかのぼる。

「いや、ここまで平和だと遠くの国で戦ってる人等がバカみたい
に思えてくるな」

悪いとは思いながらも、快晴の空の下で陽気な春風を吸い込むと、そんな言葉がつい口からこぼれてしまう。今日は進級のために朝早くから高校に向かうことになったのだが、ここまで清々しいとかえって早起きしたことが得したようにさえ思えてくる。

だが、平和というものは唐突に崩れるものらしい。

事の始まりは、いつも通り八百屋の親父さんに挨拶をしているときだった。

「ちょっと、どいてどいて！！」

「……は？」

突然聞こえた叫び声に振り返ってみると、凄い形相をしたポニール^{テール}の少女が目前までせまっていた。

そして、あまりに唐突だったために回避することもできず。

「グフツ！」

思っていた以上に少女は小柄だったらしい。あろう事か少女の頭突きが美姫夜の鳩尾にヒットし、そのまま押し倒されるようにしてアスファルトに打ちつけられる。

「……いつ、痛」

「いった〜い、ちよつと何でどかないのよっ！」

顔を見上げると少女の顔が目の前にあり、まだ高校一年のいや、今日で高校二年の俺はどうしても、この状況に戸惑ってしまうらしい。しかし、何ですか。この一昔の恋愛ゲームに出てきそうなイベントは、ゲームの中では恋愛フラグだが現実ではそうはいかんぞ。

「ちよ、ちよつとお前解ったから退いてくれ！」

「は？ 何だよ」

少女はこの状況を把握出来ていないらしい。でもこのままでも良いかな、と一瞬だけ思ったのだが、ここは八百屋さんの前、もとより商店街だ。いくらなんでもハズいし、人は少なかれ、学校に登校する学生たちやこれから家族のために働きに行くサラリーマンさんがいる。少しこちらを見る視線が痛い気がする。グサグサと刺さるような視線を浴びせてくる。

「お、お前なー。ちよつとこの状況分かんねえーのか？」

「この状況って……ッ!？」

少女は俺の言っていることを理解したのか、ようやく立ち上がり

顔を赤く染め怒ってきた。いや、明らか俺が被害者だろ。

「ちょ、ちょっとあんた何やってんのよッ!」

少女が退いてくれたので、俺もゆつくりと立ち上がる。あのこちらを見ている皆さん、俺は被害者であって加害者じゃありませんよ。

「な、なにっってお前が猪みたいに凄いい勢いで突っ込んできたんじゃないか?」

涙目で怒っている少女を見ると、俺の学校で女子が着ている制服だった。どうやら同じ学校の生徒みたいだ。しかし、どうみても高二には見えないぞ? もしかして中等部の奴かと考えていたら、少女は腕時計を見て驚いたように言った。

「んあ! もうこんな時間じゃない急がなくちゃ!」

そう言っただ一目散に走っていく。何なんだあいつ? と思いながらも妨害された八百屋の親父さんに挨拶をする。

そして、学校に向かおうと振り返った俺の足に何か当たった。

「…………ん?」

何かと思いい下を見た俺の足下には、俺が持っているものと同じ学校指定のスクールバックが一つ落ちていた。

「さっきの女子のか? …… ったく、あわただしい上にどじでもあるのか彼奴は?」

独り言のように呟いて、俺は鞆を拾い上げようとする。そして、

そこで初めて口の開いている鞆からコンビニでちょっとした話題の『ドーナテウーハウス』がこぼれていることに気づいた。

「……………？ 無類のドーナツ好きでもあるのか？」

何故ドーナツが大量にあるのか考えつつ、取り敢えず鞆の中に戻そうとしゃがんだ俺の足下に二つの影が近寄った。

「これですようちの店でなくなった商品は、間違いありませんっ！ 妙にあわてた声に顔を上げてみると、そこにはコンビニの店員と警察がいた。朝からなにやらかしたんですか〜などと冗談を考えつつ、ドーナツをしまい始めて気づいた。

「……………あれ？ この状況まずくね？」

今の会話を聞いた限りこのドーナツハウスは盗品であるわけで、それを持っている自分は窃盗犯に見えてもおかしくないはず。

「ちよつと所までご同行願おうか？」

「あはは、やつぱり……………」

第一章 始業式

案の定俺は爆笑する親父さんが視界の端に見える中捕まった。そして今にいたる。

「だから、俺じゃないですって言ってるじゃないですか！」

警察の人との取り調べを行って一時間が経つ。俺は両親が事故で亡くなって居ないため、親が引きとりに来るということはない。だから、最悪そのまま少年院と言う軽い刑務所にぶち込まれかねない。だから、必死に弁解してみるが、

「だが、しかし、君のバックから、出てきたんだぞ。盗品がこ……」

警察の人の話の途中から、ある人物が乱入してきた。

「ちょーとまったあああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああ！！！！！！」

ああ、この声は八百屋の親父さんだ。相変わらず空気読めない人だ。勢いのまま取調室に入って来るから、ドアが軽くひん曲がつちやってるぞ。この事、奥さんに知られたら殺されるかもな。親父さん、奥さんには弱いから、と昔に親父さんが頭を下げて謝っているところを思い出していると、警察の人は戸惑っている。

「何だ？ 君は」

「おおっ！ 俺様を知らないだと？ なら特別に説明をしてやろう
！ とおっ！！！！」

戸惑う警察の人に対し親父さんは、取調室の机に飛び乗り手を腰に当て、この声は人間が出しているのかと言うほどの大声で説明しだした。

「俺は松原将吾ってんだ。そこの商店街の八百屋をやっているもんだっ？　んで、こつちがミッキー、美姫夜だからミッキーだ」

以上、親父さんの説明終わり。実に分かりやすい説明だった。

「で、その松原さんは何をしに来たんですか？」

流石、警察官というべきか。もう冷静になっている。親父さんはやり終えた顔をして机から降りた。そして警察の人をスルーして、淡々と応える。

「三村さん。ミッキーは盗んでおらんぞっ」

親父さんの言葉に警察の人（三村さん）は難しい顔をする。

「松原さん関係者じゃないでしょ。帰って下さいよ」

その警察の人（三村さん）の言葉に親父さんはキレる。

「黙れやごらあああああああ？　ミッキーに罪を擦り付けた子猫ちゃんがいんだよオ」

「そうです。俺は盗んでないんだ。信じて下さい」

親父さんの後に俺もすかさず、誤解を解こうとした。そんな二人の気迫に警察の人（三村さん）は少し驚いた顔で、弱々しく言った。

「と、取り敢えず、話を聞かしてください」

そして、親父さんは朝の事を説明した。少女の事も何もかも全部を。

かくして約一時間後、俺は親父さんの助けにより釈放された。

警察の方が学校までパトカーで送る申し出をしてくれたが、丁重に断らせていただいた。警察で取り調べを受けた上でさらにパトカーにでも乗せられたら、あるはずのない罪悪感に駆られそうな気がしてきたからだ。

それに今更パトカーで行ったところで、学校初日は当然のように短縮授業だ。今頃HRでも終えて、ほとんどのやつが帰路に就いているだろう。

「はあ、進級初日からサボっちまったし、今にふさわしい一言があるとするれば散々だ。てか、なんだったんだ朝のあわただしい女は？」

溜め息混じりに罪をなすりつられた少女に腹を立てつつ、意外に童顔だが可愛かったなあ、などと無駄なことまで考えてしまう。

馬鹿だな。俺は……

そんな自分に呆れ、少女のこと自体を一度頭から忘れさせ、頭を切り替える。

そして、学校に行くべきか考えた結果、今日休んでしまったことの事情説明のためだけに学校に行くのを馬鹿らしいと思い、俺は気分

転換でもしようかと商店街を抜けたところにある駅前のカラオケにでも行くことにし交番を後にした。

華鈴は多分心配してんだろうな。メールでも送っとくか。

そして、カラオケに着くまで、罪擦り付け事件の救世主である親父さんと流行の曲が流れる商店街をとことこと歩いていた。

「親父さん。今日はありがとな。マジ助かったよ」

「アツハツハツハ、なぐに俺は当たり前前の事をしたただけだぜ。しかし、ミツキーもなかなかやるじゃねえか。とうとう、これが出来たとわな」

親父さんはにやにやといやらしく笑い、小指を立ててくる。

「ん？ 何のことだ？」

「朝のお譲ちゃんさ。なかなか、可愛かっただろ？ こんなベタ過ぎる展開はもう彼女にするしかないぜ？」

あつははー、親父さんまた朝からお酒飲んだのかね。

「親父さん、ふざけないでくれよ。確かに一瞬はドキツとした。だけど、俺に罪をなすりつけた奴なんだぜ。そんな、奴を彼女なんかにできるかよ」

「まあ、ミツキーらしいって言えばらしいな。じゃあ、俺がもらうぜ？」

ん？ 左のおっさん訳の分からん事を言ったぞ。なんて言った？
『俺がもらうぜ？』って親父さん結婚してるよな。

「ちよつと待って、あんた結婚してるだろっ！ その前に例の女は外見からして、中学生だったぞ。犯罪になるって」

俺が注意交じりのツッコミをすると、親父さんは更にとんでもない事を言う。

「そこんとは、ちょっとしたコネで何とかなんだろ？」

「うわぁ、とうとう言っちゃったよ。あんたの場合ほんとに嘘が分かんないからなッ！それにそんなことで頭使わないで、もっと店のことに使ってくれよ」

「わっははは！相変わらずミツキーのツッコミは、切れがあるな。どんだんその切れを磨いて、声だけで物が切れる様になっってくれ。じゃあな」

最後の最後にとんでもない事をお願いして、店へと戻っていった。毎日、親父さんは俺と話すときにボケをかましてくる。そのきつかけになったのが、親父さんの店に買い物をしに来た時だった。八百屋なのにブロツコリーが髪を染めて不良になっちゃった。と親父さんが言ったから思わず。

「ブロツコリーが染めるかつ！しかも、髪じゃねえし！」と突っ込んでしまった事だった。多分、親が死んでショックだった俺を元気付けるために言ったんだろう。

今日の事も含め感謝しつつもカラオケへ向かう。

第二章 カラオケ

カラオケに着いた俺はたまには一人でも良いかな、と初一人カラオケにウキウキさせフロントに行った。

「フリータイムで」

そう言っただけで会員証と生徒証を見せると。

「かしこまりました。四四番の部屋へどうぞ」

俺は店員にマイクを渡されて、目的の部屋へと向かう。四四つてえらい縁起の悪い数字だよな、とそんなどうでも良いことを考えていたら、見覚えのある姿が2つ。

「なんで、ドーナツの入った鞆を落とすかな？」

「しょうがないでしょー。まさか、あんなアクシデントが起こるなんて、予想もしてなかったのよ。私の鞆だっただけならどうしよ…」

俺は衝撃の現場を見てしまった。これは夢か？ と思ってしまう。だって朝に合った慌ただしくドジなポニーテールの少女が目の前にいる。その隣には、髪型は違えど同じ顔の少女がいらっしやる。ちなみにポニーテールの少女と同じ学校の制服を着ていた。その一人が口をパクパクしている俺に気が付いたのか。こっちに向き指を指してきた。

「……あつ、あああああああああああああああああああ
あー！！ あんた今朝のっ、ここで逢ったが百年目！ 覚悟しなさい

っ！」

「百年目どころかまだ二度目だっ！ しかも、覚悟をしなければいけない覚えが全くもって皆無だっ！！ あの後、俺がどんな目に遭ったか知ってるか？」

突然突っかかってきた向かって右側の少女に、俺はツツコミを入れながら怒鳴り返す。

「誤魔化したって無駄なんだからねっ……わっ……私を……こ、公共の場で……お、おっ……おかつ、おかつ……」

少女は何かを言おうとしているが、顔を真っ赤にし何かを喉に詰まらせた鴉のような顔をしながら、なかなか先を言い出せずにいる。ちなみに当然のことながら、そんなドジな鴉は一度たりとも見たことはない。

「丘？ ……丘がどうしたんだ？」

「おっ、犯そうとしたんだからあああああああああああああああ！？」

喉につつかえていた言葉がなんとか出てきたみたいだが、反動が何かでとんでもない声量でとんでもないことを叫びやがった。

「んなわけあるかあああああああああ！」

だが、気づけば俺自身も凄いい勢いで怒鳴り返していた。周りの人の視線が自分たちに集中砲火するが、そんなことはお構いなしに早口でまくし立てる。

「ぶざけたことぬかしてんじゃねえ！！ てめえが勝手に人に頭突

きかまして、押し倒して、そのうえ馬乗りにもなったんじゃねえか!？」

すると、向かって左側の少女が顔を少し赤くして恥ずかしそうに訪ねくる。

「お、お姉ちゃんっ、まさかのやっちゃったの！ その年で初体験とか……メモっとかないと」

おいおい、こっちはこっちで何勘違いしてんだ。とにかく、慌てて否定しようとするが俺より先に動いた人物がいた。

「ちょ、ちょっと紅音、何勘違いしてんのよ？ つーかメモるなっ！！」

右側の少女の言葉に向かって左側の少女はスルーして、妄想に浸っているようだ。

「そうだよー。お姉ちゃんも恋をする年頃だもんね。ドジで慌ただしい姉ですが、よろしくお願いしますね」

「だから、そんなんじゃねえっ!！」

「だから、そんなんじゃないっ!！」

同時に怒鳴る。この子の事だ。また良からぬ、勘違いして自分の世界に入るに違いない。案の定……

「相変わらず仲良しなこと。でも、今は仲良しでもみんながいるときは『あんたが悪いんでしょ』とか『いや、意味わかんねえーよ』とか仲悪くなっちゃうんだろっなー。お姉ちゃんの場合は……」

いつまで続くんだこれ？ と隣にいる少女に聞いてみる。

「そんなこと、知らないわよ。紅音早く戻ってきてー」

そんな少女二人を見て、何だかなと思ってしまふ俺がいた。

「むむ……閃いたっ！ これキタよ！」

「……？」

突然何を思ったか、紅音がカウンターに突然駆け出した。それを見た俺と隣のドジ姉は仲良く首を傾げる。手にはマイクが二本、多分こいつらの部屋のだろう。

「店員さん、あの人の部屋に二人追加でっ！」

「は、はい。畏まりました」

店員さんは俺らが怒鳴り合ってたのを見ていたわけで、この妹さんの唐突な発想に戸惑っていた。周りの野次馬の人たちも、みんな同じ顔をしている。

「「ハアっ!?!」」

仲の良いことにまた二人揃って叫んでしまう。

「まあ、このご時世ここで会ったのも何かの縁、親睦を深めましょ。主にお姉ちゃんとお義兄おにいさんさんですが……」

「ちよつと待てっ!! 仮にカラオケの同伴を認めるとしても、その漢字の間違いだけは断固として認められんっ!」

この妹ときたら、やっと妄想から現実に帰ってきたと思ったが、

そんなとこまで妄想してやがったのか。

「じゃあ、決まりですね。さあ、時間は待ってくださいませんよ。私のことは気にせずやっちゃってくださいでもいいですよ？」

「何をやんだよっ!!」

「何をやるのよっ!!」

「ウふふ やっぱり相性抜群ですね」

「はあ、なんでこんなヤツと……」

またもや同時に言うことになったが、今更怒る気にもなれない。

「では、改めまして自己紹介を」

「あゝ、じゃあ俺からするよ。俺は北神……」

「美姫夜さんですね。燈慶とうけい学園普通科二年、誕生日は二月八日。生まれた時の体重は二八三二グラム。両親は数年前事故死。以来、両親の残したお金をもとに生活……」

「おいおい、何でそんな内密な部分まで知ってんだよ!？」

若干引きながら質問すると、完璧主義者なのだろう。俺は簡単にスルーされた。

「していて、好物はオムライス。身長は一八一センチ。体重は六〇キロを رفتたり来たり、血液型はB型。以上です」

「以上です、じゃねえーよ。人の話を聞け!」

「では次、私が」

「だから、人の話を……」

この妹さんなかなかの大物だぞ。

「私は、妹の紅音あかねです。燈慶とうけい学園普通科二年、今日クラス見てきた

ら五組でした。誕生日は三月三日、雛祭りの日なんですよー。どうぞ、よろしくお願いしますね。お義兄さん」

こいつに何言っても無駄か。たくー、慌ただしくてドジな姉とマイペースで人の話を聞かなく妄想に浸り易い妹が、とんでもない姉妹だな。

「ほらっ、私も終わったし次姉上ですよー」
「いきなり、敬語使うなっ！」

姉は紅音に注意するが、紅音は「はいはい」と受け流している。本当にすげーな、あいつ……

「全くもー。私は、爛菜^{かんな}。ほらっ、これで満足紅音？」

短文で自己紹介を終える爛菜に物足りなさを感じたが、助け人が現れた。

「自己紹介になってないじゃん。しょうがない、私がお姉ちゃんの代わりにしてあげよう。私のお姉ちゃんは、爛菜。誕生日は私と同じで、三月三日の雛祭り。まあー、見ての通り瓜二つの双子何だぞねー。大好物は私と同じドーナツ。そしてスリーサイズは上から……」

「言わんでいいっ!!」

凄い勢いで爛菜が紅音の脳天をぶったたく。

「よくまあー、次々に言葉が出てくるもんだな」
「これだけが取り得ですからっ！」

いや、褒めてねえから自慢げに親指を立てられても困る。

「ん？ 俺が聞き間違えたのか。普通科二年って言ったか」

「はい。言いましたけど？ ああ、つまり、私たちが高校二年生に見えないと言うことですね？」

「ん、まあーってあれ？ 俺喋ってた？」

「いえ、そう言う顔をしてましたから。初めての人は大体そう思いますよ……まあ、お姉ちゃんより私の方が少し胸はありますけどね」

最後の方は声が小さくて聞こえなかったが、どうやらこんなつてのは失礼かもしれないと思うけど、俺と同じ高校二年つて事だ。

「さー、自己紹介もすんだようだし、やっても良いですよ？」

「だから、なにをやんだよっ！」

「だから、なにをするのよっ！」

紅音はきよとんと肩をすくめて、首を傾げながら笑みを浮かべて言う。

「クス……なにつて此処はカラオケですよ。歌うに決まってるじゃないですかー。それとも、なにか違うこと考えてました？」

「こいつ、わざとやってやがるっ！」

「取り敢えず、このままじゃ埒があかないし、そろそろ歌うか」

こんなくだらない会話で時間がなくなるのもばからしいので、なんとか場の収束を図る。だが、そこで俺の言葉をスルーした爛菜がマイクをくるくると指先で回しながら、思い出したかのように質問をする。

「……あつ！　そういえばあんた私の鞆どうした？　ぶつかつたとき
きに忘れたから、あんたの側に落ちてたはずでしょ？」
「……あ」

今の爛菜の言葉に大切なことを俺も思い出す。こいつのせいで俺
は今朝散々な目に遭つたんじゃないか。だが、ここでキレるのは大
人げないと思い俺は取り敢えず、伝えるべきことだけ答える。

「警察に届けましたよ」

「なんで棒読みなのよ………じゃない、なんで届けてんのよ！
私が同じ高校なのは制服とか学校指定のスクバとかでわかるでし
よ？　学校に持つてきなさいよ！！　あんた馬鹿なの？　自覚ない
だけで、大会があればインターハイにでれるくらいの超絶な馬鹿な
んでしょ！？」

マイクを持ったままの爛菜に凄い罵倒を浴びせかけられ、俺の頭
の中でブチツと何かが切れる音がして、マイク片手に怒鳴り返す。

「ふっざけんなっ！　！勝手なことばっかいつてんじゃねえよっ！
学校に届けるどころか行つてすらねえんだよ！　てめえに罪擦り
付けられて、俺がどんな気持ちで警察に行つたと思つてんだよ？
どれもこれもお前がドーナツなんかくだらねえ物を盗んだのが原因
なんだよ。　お前こそ馬鹿の自覚あんのか？」

堰を切った口はもうどうにもならず、潜水の新記録がでるんじや
ないかと思うくらいに息継ぎなしで俺はまくし立てる。すると爛菜
は肺がはち切れんばかりに息を吸い。

「は？　ドーナツなんか………くだらないもの？」

この目の前に居る少女から想像が出来ないぐらい、ドスの利いた声
がマイクを通してスピーカーから聞こえてくる。

「そつだ！ くだらねえドーナツだつ！ 普通に買えよ。一〇五円
ぐらいっ！！」

「お姉ちゃんは私の次にドーナツが好きだから、貶したりケチつけ
たり悪く言っちゃったら手を付けられないほど怒って鬼が降臨しちや
いますよ？」

妹の紅音が袖を引つ張り冷静に言ってきた。なぜ、そんな冷静で
居られる？ こっちは手から汗でベトベトになってんだぞ。しかし、
その話が本当だとしたら、もう降臨後だろうな。とベトベトの手を
制服のスポンで拭きながら考えてたら、冷静な紅音が鬼と化した爛
菜に近づいていき、

「フウー」

「ひゃっ！」

爛菜の耳に息を吹きかけた瞬間、小さな悲鳴をあげ後ずさりする。

「ちよ、ちよつと、いきなり何すんのよ？」

「ここはカラオケなんだから、歌わなきゃ！」

まさか鬼化した爛菜を一吹きしただけで、巢に戻したのか？ や
はりこの紅音、あなどり難し。それとやっぱり謝っとくべきだな。
また鬼化したら面倒だし。

「その悪かったな。ちよつと言い過ぎた」

「え？ まあ、ゆ、許してあげるわ。その代わり、もう言わないで

よね……」

てか、そんなドーナツ好きなのか？　なんか子供っぽいと思ってたら中身も子供なのか、とそんな感想を心の中で言っていると、怪訝な顔をして聞いてくる。

「なんか馬鹿にしてない？」

「し、してねえよ」

一瞬、読心術でも身についてんじゃないかねえの？　と思っただがそうじゃないらしい。

「でもなんで、向きになってんのよ？」

「お前が訳の分からん事を言うからだよ！」

「は？　私が悪いわけ？　あんただって向きになっちゃってガキじゃないの？」

「お前の方がどっからどう見ても、子供じゃねえか！」

そんな怒鳴りあっている、俺たちを見て紅音がつつとりしながら呟いた。

「本当仲が良いですねー。お姉ちゃん頑張ってるね。あたし応援してるから」

「うん、頑張る！……って、こんな奴と頑張らないし、仲良くなんて無いわよ……！」

爛菜が乗りツッコミして応えるが、この妄想少女紅音は笑いながら、

「またまたー、お姉ちゃんったら照れちゃってー。でも、これもお

姉ちゃんの可愛さの要素かも。いわゆる、ツンデレってやつかな？」

「照れてないし、ツンデレでもないっ！」

爛菜は全て否定するが、第三者から爛菜を見たら絶対にいや、確実にツンデレキャラだと思うぞ。俺も少しだけ思った訳だがな。

「もう、こんな事してたら時間が無くなっちゃうじゃない！」

「俺が先に歌うんだぞ」

マイクをくるくると回していた爛菜に言っと。フンツと笑って、曲を選択された。

「なっ！俺が先だって言ってたんだろっ！」

「爛菜蠅いわね。こういうのは、早い者勝ちなのよ」

そんなこんなで、なんとかカラオケをスタートさせることができたのだから、まあよしとしよう。

第三章 帰路

四月になって日が落ちるのも遅くなつたとはいえ、八時にもなると流石に空は漆黒に染まり星がいくつもまたたいている。カラオケを時間ギリギリまで、歌い続けた俺たちはまだ真上にはたちしていない月に照らされながら、帰路についた。

「それにしてもお前ら双子だからって、二人とも好きなものがまったく同じってわけじゃないんだな」

カラオケの時、爛菜は主に流行りのJ POP歌い、紅音はアニソンやゲーソンばかり歌っていたことを思い出した俺は、カラオケ中も考えていたがなかなか言えなかったことを口にする。

ちなみに言えなかったのは爛菜が歌っているときは紅音が大歓声を送りまくっていて、紅音が歌っているときは爛菜の殺気のせいか、空気が重かったせいだ。俺が歌ってる時は、紅音が次の曲を選択していたり、タンバリンでリズムを取っていたりしていた。爛菜は不機嫌そうに画面の歌詞を見て、

「あんたが、この曲を歌うなんて最悪。この歌手の人が可愛そうねなどと愚痴や嫌味を漏らしていた。何回俺がキレそうになったことか、こいつの言う一言一言が癩に障る。」

「まあ、双子って言っても見た目から中身まで、完璧に一緒なんてあり得ないですよ。それに……お姉ちゃんはやつと変わってるから」

「変わってるのは、あんたの方でしょ！」

なかば予想していたボケとツツコミに苦笑いしながらも、おいかけっこをし始めた二人を見てみると、姉妹がいることがうらやましく思えてくる。

「そっぴいやお前らの家ってこつち方面なのか？」

ふと、こんな時間まで娘たちが外出していたら親御さんが心配するんじゃないかと思ひ、一応聞いておく。俺が友たちと遊んでいた日に帰りが遅くなった時は、親が警察を呼ぶ寸前だったそうだ。それで俺は涙でぐちゃぐちゃにした父さんと母さんに怒られた。今思えば、親バカだったんじゃないかと思うことがいっぱいある。

「ええ、そつよ。それに安心しなさい。こんな遅くまで遊んでいても、家に帰ったら私たち二人しかいないから」

爛菜はどうやら俺の考えを見通してたらしく、淋しくそう呟いた。俺はその答えを解つていながらも、気になって訪ねてしまう。

「両親は、どうしたんだよ？」

すると先までにこにこ笑つていた紅音が今にも泣きそうなくらい声が小さく応えてきた。

「……お母さんとお父さんは去年のクリスマスに亡くなったよ」

俺は紅音の言葉に絶句する。去年のクリスマスって言つたら、四ヶ月くらいしか経つてないじゃねえか。俺の父さんと母さんが亡く

なって、半年くらい落ち込んだし悲しかったからな。こんな事を訪ねなければ良かったと悔やむ。

「あ、あのさ……も、もし良いならさ……今日は俺んち泊まらないか？」

気がつけばそんな事を言ってしまった自分がいた。そんな俺を見ている姉妹二人は啞然としている。当たり前だけど、驚き方も少し違うみたいだ。

「えっ？ で、でもあなたのお父さんやお母さんに迷惑でしょ？」

「俺の自己紹介が紅音に取られた時、聞いてなかったのか？」

「お姉ちゃん、あのね。お義兄さんは、その……私たちと同じなんだよ」

「まあ、そう言う事だ」

爛菜はカラオケで始まる前の自己紹介の時を思い出しているのだろう。腕を組んで、眉を寄せている。その姿が子供の難問を解こうしてるみたいで笑いそうになるが、ここで笑ったらシリアスな空気をぶち壊すだろうと思ひ必死でこらえた。

「……あっ！」

「思い出したか？」

「じゃ、じゃあお言葉に甘えてそうしようかしら」

「じゃあ、二人とも良い夜を」

そう言って家に帰ろうとしていた紅音を

「あんたも来るのよ！」

「お前も来るんだよ！」

今日何回目の見事なハモリ。そんな俺と爛菜を見てちゃかす。

「あらあら、仲が良い事」

紅音の発言に全体的に否定する。

「仲良くなんてねえっ!」

「仲良くなんて無いッ!」

こつ何度もハモるが、最初みたいに貶し合わなくなった。慣れだろつ、慣れつて怖いな。

「ところで、爛菜と紅音つて」

「なに?」

二人とも同じタイミングで首を傾げた。やっぱり双子だの、こついう所が怖いよな。そして俺はもう一つ、カラオケで言えなかつたことを聞いてみる。

「名字つてなんて言うんだ?」

「どうしてもって言うなら、教えてあげないこともないけど………
…聞きたい?」

爛菜が言いにくそうにもじもじしているのを不覚にも可愛いと思つてしまったのはさておき、何か馬鹿にされるような名字なのだろうか。名字や名前なんかで苛めが起こるのは、よくあることだ。この二人もそういうことに悩まされてきたのかもしれない。だが、いつかは聞くことになることだ。遅いよりは速い方がいいだろう。

「ああ、聞きたい」

「しょうがないわね。他言無用よ」

決心するかのように、爛菜はゴクリと喉を鳴らす。そして、視線をずらしゆっくりと言う。

「私たちの名字は E セトラよ」

「……………は？」

正直よくわからないというのが感想だ。確かに日本の名字ではないが、なんていうか別に苛める要素を含んでいる気がしない。ちょっと待てよ。自分が聞いてなんだが名字が E セトラと言うことは、爛菜 E セトラ？ めちゃくちゃカッコいいじゃん。

「……………言いにくそうにしてた意味がわからないんだが？」

混乱した俺の質問に答えたのは爛菜ではなく、紅音だった。

「理解力の少ないお義兄さんには、私が詳しく教えてあげましょう。私たちは英国貴族なんですよ」

「……………ハアアアアアアアアアア！ ヤバいやバいつ、俺今までダメでしゃべってたよ！？ このままじゃ、『無礼者！』とかいって殺される。もう証拠隠滅するしかねえんじゃない？ てか、まず貴族が普通高に通ってカラオケ行ったら気づくわけねえだろ！ そうだつ、俺は悪くない俺は悪くない……………」

「まあ、父が貴族の家に嫁いだ日本人の祖母から生まれたハーフで、母も日本人なんでクォーターですけど……………ていうか、混乱してお義

兄さんの思ってることが口から漏れてるうえに、なんか恐ろしい言葉がまじっていたような。取り敢えず、深呼吸してください。ヒー、ヒー、フー、ヒー、ヒー、ヒー、フー」

「俺は出産しかけの妊婦かつ！」

つい混乱状態を強引に中断してツツコミを入れてしまう。

「あれ？ 違うんですか？」

「いや、明らか違うだろ！ 俺は男だぞ！」

紅音はクスクスと笑いながら、俺と爛菜を交互に見ている。この紅音の行動は何回も見てきた。突っ込む準備を始める。

「でも、いつかお姉ちゃんもそうなっちゃうかも？ よろしくお願ひします。お義兄さん」

「お義兄さんっての止めろっ！」

お義兄さんって言われた瞬間鳥肌がたつ。そう、とんでもないことを妄想する時だ。それを見ていた爛菜は、深いため息をついて、

「この子、自分で決めた名前は頑固として変えないわよ……」

呆れ顔で言ってきた。つい普段通りに「え？ マジで？」と喋ってしまいそうになる。そんな、俺は貴族だと言つことを思い出し敬語を使う。

「お嬢さま。それは本当でございすか！」

普段使い慣れていない敬語でそう言うと、爛菜の顔が変化する。

「それ……止めてくんない？ 急に気持ち悪いし、言い慣れてないのバレバレだから」

爛菜は若干怒っているのだろう。顔が赤く染まっていた。さり気無く、酷いこと言ったな。おい……。紅音は俺が理解してないと思っただのか補足してくれた。てか、俺そんな理解力ない人間に思われている？

「いわゆる敬語ってやつだよ。お姉ちゃん誰かの上に立つの嫌いだから。敬語が嫌いなんですよ」

「そうなのか？」

そういう偏見が好きではない人は少なくないことは、なんとなく分かっていたが、こういう事態が初めてのせいかどうにも納得できない。

「まあ、嫌だつてんなら止めとくけど……後で問題になったりしないよな？」

「お義兄さんは意外に心配性なんですネ。大丈夫ですよ。断じてそんな事はありません。それにもう家の者は、全員それ相応のお金を渡して解雇しました」

「……ハア？」

「おやおや？ シンク口率上昇中ですか？」

突然の紅音の暴露に二人が愕然としているのを全く気にもとめず、紅音は呟く。

「おやおやじゃねえ！」

「おやおやじゃない！」

二人のツツコミが両側から紅音の頭部をど突く。

「……うう、痛い」

涙目で抗議をする紅音に俺たちは構わずまくし立てる。

「なに呼吸するかのような軽さで解雇してんだよっ！」

「そうよ！ 私たち全く家事できないのにつ！！ しかも、あの広い家に女子二人で住むなんて無茶よ。なに考えてんのよっ！」

「それは、大丈夫ですよ。家はもう売っちゃったから」

「ハアアアアアアア！」

「あつ！ 勘違いしないで下さいよ。お義兄さん。売ったって言うても、日本にある家ですからね？」

紅音はまくし立てていた俺たちを受け流しながら、さらに非常識なことを口にしゃがった。

「そんなの当たり前よ。もし、お屋敷まで売ったのなら、こんなじゃ済まされないからね」

「流石にそこまではしませんよ」

「そのイギリスのお屋敷にお前らは暮らしていたのか？」

「はい。そうです。因みに日本には最近来ました。日本って始めて

なんですよ」

手を広げて周りだす紅音に対し、爛菜は腕を振り下ろして

「じゃあ、私たちは何処に帰るのよっ！」

怒鳴っている。なんか世話のかかりそうだな、この娘たち。思っているところらに視線を向けて。

「住む場所ならさつき決まったじゃないですか」

落ち着いた様子で答えた紅音は、当然といった顔で俺を手でさす。こらこら、人に指を指んじゃねえ。

「お兄様が迎えに来るまで、よろしくお願いしますね。お義兄さん」
律儀に挨拶をしてきた。でも、紅音の挨拶を聞いて、どこか引つかかったところがあるんですけど、どこでしょうね……。

「お前ら兄貴がいるのか？」

俺が足をとめ訪ねると、爛菜は今日一番嫌そうな顔をして話してきた。

「ええ、居るわ……名前だけの兄貴がね」

「お、お姉ちゃん……」

なんだ？ その兄貴と仲が悪いなのか。爛菜は。でもそこには触れないでおこう。こいつ等にはこいつ等の事情があるからな。

時間差攻撃

「今日からお世話になります。北神家よろしく！」

「そう言うのは普通、俺に言うんじゃねえのか？」

「あつ！ よろしくお願いします。お義兄さん。私は二人の邪魔にならないように頑張りますから！」

「「頑張らなくていい！」」

二分足らずでやっと俺の家に着いた。只今の時刻は八時四五分、そろそろお腹がすいたから手を洗って台所に向かう。

「それにしても、いきなり過ぎんだろ。俺らは今日初めて会ったんだぞ？」

「確かにそうですよね。なんか私たち、初めて会った気がしませんよ」

俺は独り言を言ったつもりだったのだが、どうやら聞こえてしまっただけらしい。

「俺だって、そつだよ。今朝に初めて会ったのに俺の家で居候って、どんだけ急展開過ぎる話だったの」

「なに？ あんた、そんなに不満なの？」

「不満でわけじゃねえんだけどさ」

「じゃあ、いいじゃないですか」

「そつだな。いちいち気にしてる必要はないか。でも、今日の飯足りるかな？」

今まで一人暮らしだったから、三人分の飯があるか心配でキッチンの中に入ると、思い出した。

「ふうー、思い出したぜ。昨日カレー作りすぎたんだったな。なあ、昨日の残りのカレーで良いか？」

俺がお嬢様ら二人に聞いてみると、カウンター越しから爛菜はソファーに横になり、

「お腹すいたアー。食べるものだったらなんでも良いイー」

子供がオモチャをねだるように喚いていた。ほんとに外見だけじゃなく、中身もガキだな。てか、パンツ見えそうだしよ。一方妹さんはと言つと。

「いいですね。カレーは一晩置いておくと、コク出ますから！ お義兄さん。私も何か手伝いましょうか？」

紅音が小首を傾げて訊ねてきたので、お皿を差し出す。もう完璧に、お義兄さんって言われ慣れてんな俺。どっちが、姉か判んねえな。

「ん？ じゃあ、皿を机に並べといてくれ」

「解りました」

紅音は敬礼して皿を受け取り、リビングに向かっていった。住むのは別にかまわないけど、服とかどうすんだ。そこへ皿を並び終えた紅音が戻ってきた。

「どうしました。お義兄さん？」

「そういえば、お前は家を買ったんだよな？」

「はい、そうですけど、それがどうかしましたか？」

今更なに言ってるんですか、という軽さで言われる。普通ありえねえからな。

「ああ、それで服とか家具なんかは、どうしたんだよ？」

「それなら、心配いりませんよ。家具は全て恵まれない子供たちの所に寄付しましたし、服は宅配でいつか着くそうです」

こいつはすごい事を普通に言うことを止めた方がいいと思うぞ。最初なんて言った？

「えっと、家具の全てを恵まれない子供たちに寄付しましたって言いましたけど？」

「そうだよな。聞き間違えじゃないよな。良かった良かった……」

……って、そうじゃねえっ！ それって凄いことじゃね？ それと、心読まなっ……」

紅音は小さい首を傾げて、きよとんとしている。

「そうですか？ 私はお母さんからお小遣いを貰っていたんですけど、その半分は募金してまして、それが当たり前のようにしてましたから、凄いや言われたのは初めてです」

心を読むなっ……ところはスルーですか、軽く傷つくからな。でも、もう何回言っても、完璧にスルーするんだな。

「そのお小遣いを半分を募金するだけでも凄いのよ、それを続けるなんて、めちゃくちゃすげえよっ……」

「あ、ありがとうございます。あはは」

褒められることに慣れていないのか、少し顔を赤くして笑っている。

「いい事なんだろうと思うけど、でもなんで、そんなに募金してるんだ？」

「それは子供たちを助けたい、ただそれだけですよ」

俺は正直驚いた。俺がお小遣いのを貰っていた時は、漫画を一、二冊買うだけでそれ以外は遊びに行く時の為にしか貯めておかなかった。ましてや募金なんて考えたこともなかった。

「お前凄いな……感心するよ」

「やめて下さいよ、お義兄さん。私が好きでやってるんですから」

止めてと言われても、感心するしかなかった。多分……じゃないな。こいつは優しいんだ。

「そこで話戻すけど、その服やらはいつ来るんだ？」

紅音は腕を組んだあと、制服のポケットかれ携帯を取り出しどこかに電話をかけた。

「もしもし、紅音ですけど。荷物は積みました？……あ、そうですね。その荷物をちよつと待て下さい。お義兄さん、この住所を教えてくださいませんか？」

紅音に言われて、住所を教える。しかし、紅音の事だから俺の内密な部分まで知っていたから、住所も知ってるもんかと思った。

「お義兄さんの住んでる所は何丁目ぐらいまでは分かっていたんですが、現時点でお義兄さんのプロフィールは全部埋まりましたよ。お疲れ様でした」

「マ、マジで？ 流石に全部は、ないだろうっ！」

「では、お聞かせしましょうか？」

怖いです。笑顔で敬語つてのが、やけに怖いです。

「え、遠慮しておきます」

「そうですね………えっちな本を机の引き出しに入れてますけど、それでは簡単に見つかってしまいますよ。と忠告したかったんですが、残念です」

あの普通に聞こえてんだけど、それに何故それを知っている。その引き出しには鍵がかかってんだぞ。そしてどうやって開けた。壊したのか？ だが、そんな時間あったか？ 慌てて二階に行こうとすると、服を捕まれて

「大丈夫ですよ。壊してませんし、ちゃんと紅音の七つ道具を使いましたから」

「なんだ、それ？ それ聞いたら、余計に不安になるわっ！」

何なんだこの娘、忍者なのか？ そして、一番疑問に思うことは応えなかった。家に帰ってきて、今に至るまで紅音はずっと俺か爛菜の側に居た。それなのにその件を知っている。どうやって、知ったんだよ。

「それは乙女の秘密です。えへっ」

くっ、一瞬だけだが可愛いと思っちまった。そりゃそうだぜ。この双子、カラオケの時には気がづかなかったがなかなかの美の付く少女だぜ。不覚に思っていると、手を動かしていない事に気がついたふうー、と息を吐き顔を上げるとソファーに寝転がり携帯をいじっている爛菜の姿が目に入った。リラックスし過ぎじゃね？

「双子で顔が瓜二つでも、性格は全然違うよな……」

そんな独り言をポツリと呟く。その直後、目の前にご機嫌斜めの顔をした爛菜が現れた。あれ、そのソファーで携帯いじってた人と同一人物ですよ？一瞬でここまで来たのか？

そこは流石双子って事ですかね？でも、そんな感心している場合じゃないですよ。こいつも紅音みたいに情報収集力に長けてんのかね？いや、それはないな。だってこいつドジだから。

「……ねえ？なんか失礼な事考えてない？」

「うおっ！　ないない、考えてない。んで、どした？」

やっぱり、こいつも気を付けなければな。そんなことを心に決めていると、爛菜が小さく呟いた。

「……わ、私も何か手伝う」

「は？」

「だ・か・ら！　私もなんか手伝ってあげるって言うてんのよっ！
！」

いきなり背後に現れたせいで状況理解に苦しんだが、なんとか言葉を返す。

「……あ、ああ！ 手伝いな！ 手伝い……てか、火も通ったしあとは装っただけだし、気持ちだけ受け取っとくよ」

火が通ったのもあるが、正直手伝ってほしくない。手伝わせると何かとつもないドジをおかす気がしてならない。それなのにこいつときたら何を勘違いしたのか……

「いいのよ、いいのよ！ 遠慮しなくて、実は私料理は得意なんだから！」

爛菜の言葉を信じきれずに紅音の方をちらりと見る。案の定、紅音はアメリカ人のようなジェスチャーで両手を上げて首を横に振ってくる。あ、はい。判りました。全くダメって事ですね。

「いや！ ちよっ……マジでやることないからっ！」

「あ、そうだ！」

何を思いついたか、爛菜は紅音の鞆の下に駆け寄り、中をかき回している。そして、何かを取り出した爛菜は駆け戻ってくる。

「ん？ なんだそれ？」

正直な気持ちを口にすると、爛菜は見下すようにご丁寧に説明をする。

「あんた知らないの？ チョコレートよ。チョコ・コレ・イト！ 一般的におやつとして出される原料カカオの甘い食べ物よ！」

「チョコレートに疑問を持ったわけじゃねえ！ それを何に使ってとこだ」

「隠し味よ！ か・く・し・あ・じー！」

「隠し味つつてもあまりチョコレート入れ過ぎんなよ！」

爛菜が持っているのは、百円で売っている板チョコだ。それを袋いっぱいにつけてきている。これも盗んだんじゃないだろうな。どんな万引きの方法したら、こんなに盗めんの？

「分かってるわよ！ こんな全部入れたら、チョコに具を入れただけにひやつつちやうじゃない」

「しゃっくりして、チョコレート全部入れんなよ……」

俺が二つに意味で呆れていると、まてよ。こいつの弱み握ってんじゃない。

「うつ、うつさいわね！ ちゃんとやれば良いんでしょ？」

「お義兄さん、お姉ちゃんに任して下さい。お嫁に行くときに料理が出来なかつたら、お義兄さん、大変でしょう？ だから、花嫁修業的な意味でやらせてあげて？」

紅音が小首を掲げて聞いてくる。ほう、お前は姉のために自ら地獄に向かうか。それと、こいつなんかを貰うつもりないぞ。

「お義兄さん？」

「……あつ、そ、そうだな。やらしてみよう。うん！」

そう言い終わると俺はリビングの方へ歩いて行く。こつ急かされながら聞かれると、判断力が衰える。こうして俺も地獄に先導されることに。

「じゃあ、お姉ちゃん頑張ってたね！」

爛菜が準備を終わるまで、リビングで紅音と話をして待っていた。そして五分ぐらいすると

「出来たわよ」

そう言うと、リビングの別名黄泉への扉が開かれて、爛菜がご飯の上にカレーをかけた皿を持ってきた。

「今月最高の味ね！」

上機嫌で皿を俺、紅音、爛菜の目の前に置く。今月って……。

「そんな甘いのか？」

「俺がベースのカレー作ったんだがな」

「でも隠し味したから、目玉が飛び出るほど甘いわよ！」

そう言っている爛菜を無視する。しかし、今おかしなこと言っ
てなかつたか？

「「いただきます」」

何か心に残ったが、まあ良いかとカレー一口サイズを口に入れる。

「さあー、食べなさい」

口に入れて味わっている刹那。

「「……………ッ！」」

俺と紅音としては衝撃的だったが、なんとか驚きを言葉として紡ぐ。

「……………い、意外……………と美味しいな」

「……………ですね」

食べた瞬間舌に広がる少しピリツとする味の後に少しだけ甘い味が来て、正直美味かった。すると、立ち上がった爛菜が、料理で使ったまな板でも詰めているんじゃないかと疑いそうな薄さの胸を張り、自慢げに言う。

「当然よ！ この爛菜様にかかれば、料理の一つや二つ……………」

「……………ウグツ！」

「……………ゲフツ！」

爛菜の自慢は俺と紅音の呻きによって、中断される。紅音があんな呻き声を上げるなんて相当のことだろう。

「な、なんだ！ 喉にじわじわと広がるこの気持ち悪い甘さ……………ン？ しかも、なんか超絶に辛いイイイ！！ さっきの甘さはどこへ行ったアア！」

「……………くっ……………まさかの時間差攻撃？ これはなかなかの武器になりますよ。美味しいと頭が感じて、幸せでいるうちに奈落の底へと一気に落とす。美味しいと感じ分だけ、ダメージは大きくなる。私は分析しました。お姉ちゃん、なかなかやりますね。油断しましたよ……………」

感想を残した二人は仲良くブラックアウトし、旅立っていった。

「そんなバカな！」

そう言っつて爛菜もカレーを一口食べてみる。

「なあーに？ 普通の味じゃない！」

白目を向いている俺と紅音を見て、疑問に思う爛菜はどんどんカレーを食べていく。

「なんで、こんな美味しいのに気を失うわけ？ そうか！ あまりにも美味しいからに気を失ったのよ！ そっか、そんなに美味しいのね。フッククク、あっはははは！ 私にかかれば、こんな朝めし前よ」

あまりに喜んでいいるが実際は美味しくなくて気絶したんじゃない、めっちゃくちゃ不味くて気絶したことを爛菜は知らない。淡々とカレーを食べ続け、とうとう完食した。食べ終えたカレーが入っていた鍋を台所まで持って行く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2506z/>

俺と双子の彼女たち

2011年12月11日10時54分発行